

テーマ 『救護施設における地域移行に向けた取り組みについて～社会生活
力プログラムの活用～』

チーム名 のぞみの家

メンバー 支援員 下浦 圭介
主 任 吉田 勝彦
主 任 井上 歩
支援員 吉川 龍之介
支援員 小倉 隼也

I はじめに

救護施設は、通過・中間施設とも呼ばれることもあり、生活保護受給者（生活困窮者）が、生活の立て直しを図り、地域生活を目指す施設である。

平成 27 年度より、生活困窮者自立支援制度が開始され、自立した生活のために、居住の確保、就労準備・就労訓練支援、家計相談などが柱として示されている。また、就労支援においては、「中間的就労の機会」の提供などが盛り込まれ、「多様な就労機会の確保」や、「中間的就労の場」の提供も生活困窮者への支援として求められている。

しかし、入所者の高齢化、福祉ニーズの多様化により、入所期間が長くなるケースも少なくない。また、職員にも広範囲で福祉、医療的な専門知識・技術が求められている。

今後、救護施設としては、「通過」「中間的」な役割や支援を実施しながら、「高齢化」「多様な福祉ニーズ」をもった利用者に対して支援をおこなうことが求められている。しかし、通過や中間的という言葉には、利用者にとっても働く職員にとっても、範囲も広く漠然としている様にも感じられる。その上で、救護施設が利用者や地域社会においてどのような役割を果たしているのか、求められているのか。救護施設のぞみの家（以下、のぞみの家）で実施している『社会生活力プログラム』を中心に、施設での取り組み内容について考察した内容や結果を報告したい。

II 研究の目的

のぞみの家で生活している利用者から「自分はどうすれば、社会生活に戻れるのか？」という疑問をよく聞く。生活に必要なスキルにおける客観的な評価値があるとするならば、それを示すことにより、施設生活を送る利用者にも、各利用者の支援を行う職員にも、どの部分に焦点を当てて、支援すれば良いのか明確となる。

のぞみの家では、平成 29 年度より週に 1 回「社会生活力プログラム」と題し、

自身の地域生活への移行に向けてグループワーク等をおこなう機会を設けているが、目に見えての能力の向上や評価値が示されるまでには至っていない。

平成 30 年度は、実践的な地域生活へ活用できるプログラムの実現と、本人や支援者にもわかりやすい地域生活移行に向けた評価・指標づくりが求められた。

Ⅲ 救護施設のぞみの家の現状

のぞみの家では定員 100 名の入所者（男女比 6：4）の方が生活されている。日中は、外部委託作業（緩衝材作業、バリ取り作業等）や、セラピスト（PT、OT、ST）による指導のもと、プログラムされたリハビリ訓練や、ボランティア講師等による日中活動（音楽セラピー、ドックセラピー等）、利用者の ADL 等にも配慮した活動を取り入れている。また、地域移行に向けて神戸市からの委託事業として居宅訓練事業も実施しているが、100 名の利用者に対して年間 3 名程度の訓練事業である為、日中活動のようにたくさんの利用者の方が参加できる状況には至っていない。

表 1、表 2 は、各年度のぞみの家の入退所先状況である。

表 1 救護施設 のぞみの家 受け入れ先（入所前）状況表（単位：名）

	居宅	病院	他施設	ホームレス	合計
平成24年度	4	11	0	22	37
平成25年度	3	13	4	24	44
平成26年度	0	10	1	14	25
平成27年度	2	15	2	22	41
平成28年度	1	18	0	9	28
平成29年度	1	16	1	4	22

表 2 救護施設 のぞみの家 移行先（退所）状況表（単位：名）

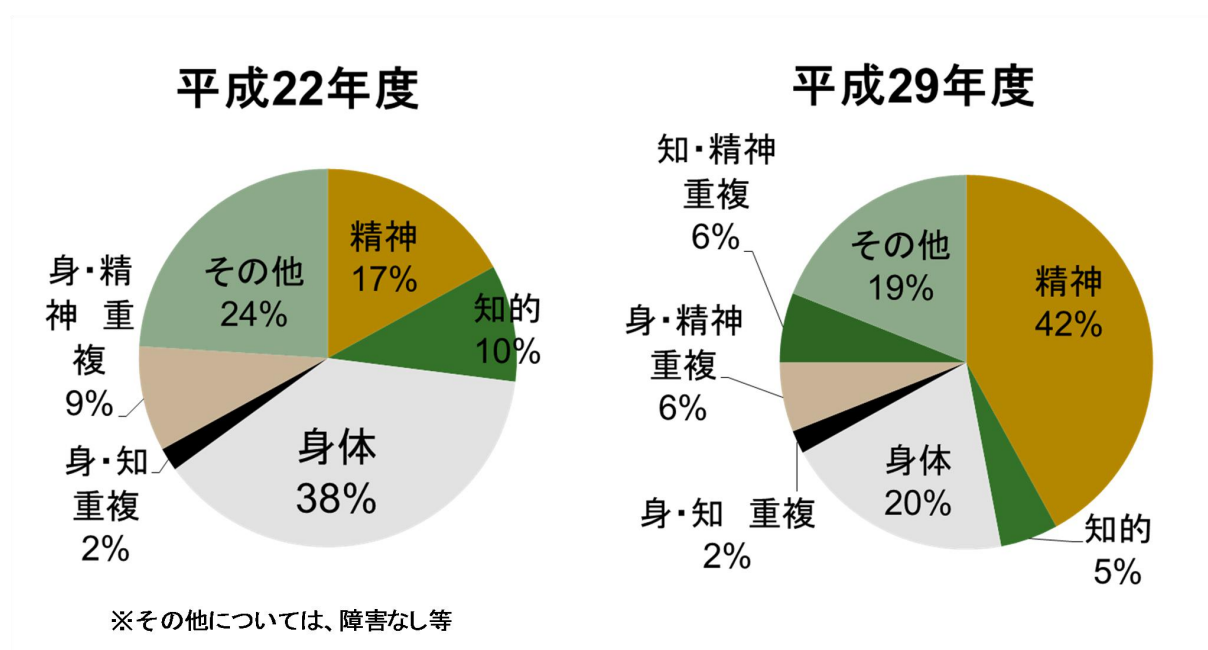
	居宅	病院	死亡	他施設等	合計
平成24年度	17	3	3	14	37
平成25年度	29	0	5	9	43
平成26年度	21	0	3	9	33
平成27年度	17	3	1	12	33
平成28年度	18	3	0	5	26
平成29年度	8	2	3	9	22

近年の傾向として、ホームレスの方よりも、病院からの受け入れが多くなっている。また、移行先（退所）についても、居宅生活への移行が少なくなっている。居宅への移行が少なくなった理由としては、病院から入所される方の傾向として、身の回りのケアが必要な方が多く、年齢も高齢である傾向がある。

しかし、ホームレスで生活を送られていた方は、病院で入院されていた方より比較的身の回りのことは自分で出来る方が多い傾向にある。のぞみの家では、4、5年前と比べても、社会生活力の把握及び向上に向けての必要性が迫られている状況である。

また、図1「のぞみの家利用者の障害状況の変化」について、精神障害を罹患している方の割合が平成22年度で17%、平成29年度になると42%、重複の方も併せると半分以上の方が何らかの精神障害を罹患している。のぞみの家が取り組むべき課題としては、上記のADLに配慮した活動に加え、精神障害等の障害特性に配慮した社会生活力の向上に向けたプログラムも必要であり、「社会生活力プログラム」と題して、活動を実施している状況である。

図1 『のぞみの家利用者の障害状況の変化』



IV 社会生活力プログラムの取り組み状況

(1) 社会生活力プログラムとは

のぞみの家での「社会生活力プログラム」は、中央法規から出版されている『自立を支援する社会生活力プログラムマニュアルSFA (Social Functioning Ability)』を基本としている。プログラムの初回のオリエンテーションで、“社会生活力とは、自分のニーズを満たしながら、自らの人生を主体的に選択し、社会参加していく力”と確認した。活動の進め方として、社会生活力に必要な項目(表3)とされている25のモジュールから参加者の関心の高いものから選択し、疑問を話し合ったり、実践したいことを体験したりすることを主体として活動を進めた。

（２）取り組み内容

活動の頻度は、毎週木曜日の 14：30～15：30 とした。

対象者については、①地域生活を目指している人②就労を考えている人③施設生活の中で少しでもできることを増やしたい人というチラシも掲示して、利用者に参加を呼び掛けた。

取り組みのねらいとして、各モジュールのPDCAサイクルに基づき、利用者のニーズに沿ったプログラムを提供できるように努めた。

ファシリテーター（職員）は、グループワークや実践で、目的に応じた気づきのヒントを参加者に提供することで、目標や課題を具体化、明確化できるように努めた。また、「SSTファーストレベル講習会」に、平成30年6月と10月に2日間、2名ずつ参加し、SST（社会技能訓練）についての講義を受け、モデルセッション・演習・グループワーク等を学んだ。

毎回の活動では、社会生活に必要なスキルとして、日々のワークシート及び出席簿に、氏名、日付、押印、その日の体調（検温）とその理由についても記載してもらった。

取り組みたい内容（モジュール）の決定は、初回のオリエンテーションや、各モジュールの振り返りで、参加者と話し合って実施した。今年度に取り組んだ内容については、下記の表3のとおりである。

表3 平成30年度 のぞみの家 社会生活力プログラムの実施内容について

	項目	実施日	グループワーク	内容	実践 (SST等)	参加者
1	オリエンテーション	5月10日	社会生活力プログラムの進め方について			14名
2		5月17日	関心のあるモジュールについて			14名
3	SST	11月22日			〔SST〕日常生活の中で困っていること。～テレビのチャンネルを変えてほしい～	14名
4		11月29日			〔SST〕日常生活の中で困っていること。～テレビのチャンネルを変えてほしい～	14名
5		12月13日			〔SST〕SSTの振り返り	14名
＜第1部 生活の基礎をつくる＞						
6	モジュール1 精神医療	3月7日	体調が悪くなるサイン 病院受診と、薬局で薬を買うメリットデメリット			15名
7	モジュール2 健康管理	6月7日	健康管理について		グリッターバッグを使用した手洗いの方法	14名
8		6月14日	最低限、覚えておきたい調理			17名
9		6月21日			お米の炊き方、冷凍保存の仕方、お茶の沸かし方 味噌汁の作り方 火を使わないポテトサラダの作り方 冷凍ご飯の解凍方法	17名
10		6月28日				17名
11		7月5日	調理実習の振り返り			16名
12		1月24日	バランスの良い食事とは			15名
13	モジュール3 食生活	1月31日	バランスの良い食事メニューを考える			16名
14		2月7日			食事バランスガイドを使用し、栄養バランスチェック	14名
15		2月14日	理想の朝食メニューを考える			14名
16		2月21日			調理実習 バランスの良い朝食作り	14名
	モジュール4 セルフケア					
	モジュール5 生活リズム					
17	モジュール6 安全 危機管理	6月1日	防災 災害について		消火器の使い方	13名
18		11月8日			三木防災センターにて地震体験、防災学習等	9名
＜第2部 自分の生活をつくる＞						
19	モジュール7 金銭管理	12月20日	お金の使い方 管理方法			17名
20		12月26日	節約の方法について		実際に必要な1か月の生活費を計算	18名
21	モジュール8 すまい	3月14日	ゴミの分別について		ゴミを分別してみる	15名
22	モジュール9 掃除 整理	7月12日	掃除の道具、場所について			14名
23		7月19日	掃除の頻度、方法について			16名
24		8月9日			居宅を実際に掃除してみる。風呂場、キッチン、リビング等の清掃)	17名
25		8月30日	掃除の様子をビデオに録画し、振り返り			16名
	モジュール10 買い物					
	モジュール11 服装					
＜第3部 自分の理解とコミュニケーション＞						
26	モジュール12 自分の病気と 障害の理解					
27	モジュール13 コミュニケーション	9月6日	コミュニケーションで気を付けていること		言葉のみのコミュニケーション（人が紙にかかれた図形を言葉だけで説明し、それを参加者に描写してもらう）	16名
28		9月13日			言葉を使わないコミュニケーション お題に対して、ジェスチャー等を使用し、参加者に何がお題が当ててもらう）	17名
29		10月4日	コミュニケーションで大切なこと（振り返り）			16名
	モジュール14 家族関係					
	モジュール15 友人関係					
	モジュール16 支援者と関係					
＜第4部 地域生活を充実する＞						
	モジュール17 教育と学習					
30	モジュール18 就労生活	10月25日	就労について資格試験や面接時のマナー			17名
31		10月26日			数字検定受験	5名
32		10月27日			漢字検定受験	10名
33	モジュール19 恋愛 結婚・子育て					
34	モジュール20 外出 余暇活動	10月18日	外出の仕方 公共交通機関 スケジュール管理の方法等)			15名
18		11月8日			※三木防災センターへの外出	9名
35	モジュール21 地域生活 社会参加	10月11日	地域参加と外出の違い 外出で必要なこと 持ち物 マナー等)			15名
＜第5部 自分の権利をいかす＞						
	モジュール22 障害福祉制度					
	モジュール23 日中活動 サービス					
	モジュール24 地域生活 サービス					
	モジュール25 権利擁護					

モジュールの中で年度中に実施できなかったことについて、例えば、第5部の「自分の権利をいかす」という単元がある。グループワークを主体として進めていく上で、のぞみの家での参加者の特性上、障害の有無や程度が混在しているため、個別で実施することが個々への配慮にも繋がると職員も判断した。

(3) 社会生活力プログラムの効果

社会生活力プログラムを進めていく上で、モジュールごとに、PDCAサイクルを意識し取り組んだが、それらは、社会生活を送る上でも大切なことであることを参加者が学ぶことを目標とした。今年度の活動を振り返り、プログラム全体を通じての目標、実施方法、達成状況について紹介する。

① 社会生活力プログラムを実施する上での準備・計画段階

《目標》社会生活で必要となるニーズ（課題）を見つける。

○実施方法

- ・各モジュールの提示・説明
- ・社会生活における素朴な疑問や、個別ニーズの開示。

◎達成状況

- ・社会に必要なスキルにおいて、グループワークでイメージしていたことを実践することで違いを参加者が感じる事ができた。
- ・「できない」部分を課題と認めることができる参加者とできない参加者はあった。
- ・できないことを自分でできるようになる（訓練を実施する）のか、社会資源に頼るのかという部分は、個別支援として対応が必要であった。

《目標》物事を始めることは、準備や（体調等の）確認が必要であることを知る。

○実施方法

- ・プログラムが始まるまでに、出席簿の押印、身だしなみチェックシートを作成、その日の体調の確認を済ますことを目標として参加者に伝えた。

◎達成状況

- ・事前に自身の体調の把握、「今日は、体調が悪いので欠席します」と報告できる参加者が増えた。
- ・自分のことだけでなく、皆が使用する机や、ホワイトボードを準備・片づけをする参加者が増えた。
- ・出席簿、検温、身だしなみチェックを毎回つけることで、自身の変化や継続することから、習慣化することの重要性と、自信に繋がった様子がみられた。

② 社会生活力プログラムの中での実践

《目標》対人関係やコミュニケーション能力が社会生活に必要であることを知る。

○実施方法

- ・グループワークやS S Tを通じて、司会、書記、発表等の役割意識を持ち遂行すること、自分の考えを簡単に伝えること、人の話を最後まで聞くことを意識して取り組んだ。

◎達成状況

- ・グループワークについては、回数を重ねるにつれて参加者のみで進行ができるようになってきた。
- ・S S Tでは、「人が見ているテレビを自分の意見で変えてもらえることは無理ではないのか」と予想し、ロールプレイが始まったが、お願い役とテレビを見ている役のどちらとも役を演じることで、お互いの気持ちが理解でき、実際の生活場面でも無理だと決めつけず、話をしてみることは大切であるという意見が出た。



※ S S Tの様子

《目標》自分の社会生活力を知る。

○実施方法

- ・社会生活力のモジュールの取り組みについては、参加者の希望を聞き、要望（ニーズ）の多いモジュールから優先的に実施した。
- ・テーマに応じて小グループ（5～6人）のグループワークで出てきた意見を皆で共有する⇒意見が多いものや皆が関心の高いことについて実際にできることがあれば、実践する⇒振り返りや報告会を行うといった流れで実施した。

◎達成状況

- ・食生活、コミュニケーション、就労生活といったモジュールに関心が高かった。
- ・調理では、食材を切ったり、焼いたりすることのイメージはあったようだが、ガスコンロをつけたり、電子レンジの使い方等のイメージはなく、できない参加者もあった。
- ・グリッターパグを使用した手洗いの状況を確認すると、「思っていたより

汚れていた」、「こんな手で食事していたのか」といった意見や振り返りがあった。



※グリッターパグを使用した手洗い方法（モニタリング）の様子

《目標》経験だけでなく、目に見える形で自分のスキルを確認し自信に繋げる。

○実施方法

- ・「資格を取りたい」という希望があり、数学検定・漢字検定を実施した。
- ・のぞみの家を、認定準会場として申請し、認定を受けた。

◎達成状況

- ・資格を取るという目標だけではなく、目標に向けて取り組む姿勢は、訓練以外の時間でも勉強に取り組む参加者があった。
- ・数学検定については、受験者 5 名の内 4 名が合格（1 名は 3 級の 1 次のみ合格）。
- ・漢字検定については、受験者 10 名の内 6 名が合格。
- ・不合格であった参加者も「次も挑戦したい」という要望があがった。



※漢字検定（受験会場）の様子

③ 社会生活力プログラムでの振り返り

《目標》社会生活力の課題を見つける。

○実施方法

- ・自分がやっている姿をビデオや写真に撮る。

◎達成状況

- ・視覚的に振り返ることで、自分のイメージと現状の差を客観的に確認した。
- ・参加者によっては、課題があることに対して地域生活に支障が出るという考えが難しい方も中にはいた。

《目標》周りの人や社会資源に頼ることが必要であることを知る。

○実施方法

- ・振り返りを行う中で、生活の方法や考え方にはいろいろな方法や選択肢があり、自分には思いつかないようなものがあることを実感することを大切にした。
- ・話すことが得意な方、書くことが得意な方が、周りにはいること、手が不自由でも調理器具を運んだり、人との関わりが苦手でも包丁がうまく使えたりする方がいるということを振り返りの中で共有した。

◎達成状況

- ・〇〇さんはこんなことが上手だった、手伝ってくれた。自分は〇〇が上手にできた等、自分にできることや、人に助けてもらったことを共有できた。
- ・周りに手伝ってくれる人がいても、どのタイミングでSOSを出すのか、人を活用するのは、練習が必要である。

(4) 社会生活力の指標

社会生活力プログラムの活動を実施する上での目標として、目に見える形で参加者の評価や課題が示すことのひとつに、菊池章夫氏より作成された、K I S S - 1 8 「社会的スキルを身につけている程度を測定する」の測定概念（※注1）をもつ心理判定を取り入れた。尚、ここでいう社会的スキルは「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル」と定義される。項目別質問に対し、いつもそうでない（1点）、たいていそうでない（2点）、どちらともいえない（3点）、たいていそう（4点）いつもそう（5点）の5段階の点数をつけた。

（表4）また、調査対象を「社会生活力プログラムに参加している利用者」、「社会生活力プログラムに参加していない利用者」、「職員」とし、利用者については、質問の意味や、利用者自身のイメージと実際がかけ離れることもあったので、職員からの意見も反映した形で評価をつけ、職員自身の評価は自己評価と

し、各対象の平均点を算出した。

表4 のぞみの家 利用者 職員における、KISS-18（菊池 1988）心理測定結果

項目	いつもそう た (5点)			たいていそう た (4点)			どちらともい え ない (3点)			たいていそ う で ない (2点)			い つ も そ う で は な い (1点)			平均 点 数		
	社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員	
① 他人と話していてあまり会話が途切れない方ですか		1		2	1	6	3	3	6	7	6	1	3	4	2	2.27	2.27	3.07
② 他人にやってもらいたいことを、上手く指示することができますか	2			1	1	3	2	6	6	8	3	6	2	5		2.53	2.20	2.80
③ 他人を助けることを上手にできますか	3			3	2	3	5	7	9	1	4	3	3	2		3.13	2.60	3.00
④ 相手が怒っているときに、うまくなだめる事ができますか					1	4	8	7	7	3	6	3	4	1	1	2.27	2.53	2.93
⑤ 知らない人でもすぐに会話が始められますか				2	2	2	3	4	5	4	2	7	6	7	1	2.07	2.07	2.53
⑥ まわりの人たちのあいだでトラブルが起きててもそれを上手に処理できますか				3	1	1	4	3	7	6	8	6	2	3	1	2.53	2.13	2.53
⑦ こわさや恐ろしさを感じた時にそれを上手く処理できますか			1			4	9	10	7	5	2	1	1	3	2	2.53	2.47	3.07
⑧ 気まずいことがあった相手と上手に和解できますか	2	1		1	2	2	5	6	9	1	4	4	6	2		2.47	2.73	2.87
⑨ 仕事をする時に何をどうしたらよいか決められますか				1	1	7	7	8	7	3	5	1	4	1		2.33	2.60	3.40
⑩ 他人が話しているところに気軽に参加できますか				1	3	2	8	3	6	3	5	6	3	4	1	2.47	2.33	2.60
⑪ 相手から非難されたときにでもそれをうまく片付けることができますか				3	2	1	6	7	10	3	4	4	3	2		2.60	2.60	2.80
⑫ 仕事の上でどこに問題があるのか直ぐにみつづけることができますか				2		4	3	3	9	8	9	2	2	3		2.33	2.00	3.13
⑬ 自分の感情や気持ちを上手に表現できますか	2		1	2	1	2	5	6	6	3	2	4	3	6	2	2.80	2.13	2.73
⑭ あちこちから矛盾した話が伝わってきても上手に処理できますか				2		2	3	4	7	7	9	4	3	2	2	2.27	2.13	2.60
⑮ 初対面の人に自己紹介が上手にできますか	2		1	2	1	4	5	5	6	6	8	3		1	1	3.00	2.40	3.07
⑯ 何か失敗した時に直ぐに謝ることができますか	4	2	3	2	1	7	6	7	1	2	3	4	1	2		3.40	2.87	3.60
⑰ まわりの人たちが自分とは違った考えをもっていてもうまくやっていけますか			1	2	1	6	2	1	5	8	9	3	3	4		2.20	1.93	3.33
⑱ 仕事の目標を立てるのにあまり困難を感じない方ですか				1	1	5	3	2	6	8	5	4	3	7		2.13	1.80	3.07
合計	15	4	7	30	21	65	87	92	119	86	94	66	52	59	13	45.33	41.80	53.13

菊池によれば、尺度得点の平均値は成人男性 61.82、成人女性 60.1 と示されていた。のぞみの家での社会生活力プログラムは、これらの評価を踏まえ、自分は平均より上であるとか、平均点がなかったから駄目ではなく、項目別に振り返り自分の強みや弱みを整理することに着目した。

ゴールドステイン氏ら（※注2）は、青年にとって必要な社会的スキルは6種類に分類している。初歩的なスキル、高度のスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキルである。（表5）

表5 のぞみの家 利用者 職員における「青年にとって必要な社会的スキル」分類結果

初歩的なスキル ①⑤⑮			高度なスキル ②⑩⑯			感情処理のスキル ④⑦⑬			攻撃に代わるスキル ③⑥⑧			ストレスを処理するスキル ⑪⑭⑰			計画のスキル ⑨⑫⑱		
社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員		社会 生活 力 参加 なし	職 員	
7.33	6.73	8.67	8.40	7.40	9.00	7.60	7.13	8.73	8.13	7.47	8.40	7.07	6.67	8.73	6.80	6.40	9.60

※表中の○番号は、KISS-18の項目番号とする。

この評価を行うことで、計画のスキルが高く、初歩的なスキル（会話等）が低いという結果であれば、就労面では人との関わりが少ない環境が合っているのではないかと評価できる。

逆に計画性が低ければ、構造化されたルーチンワークが準備された環境が必要であると本人も支援者も社会スキルの理解が得やすくなると考える。

（５）考察

社会生活力プログラムを実施していく環境について、利用者の生活リズムの確立や、社会スキルの向上のためには、自立訓練や就労移行支援事業所のように、活動の頻度を多くし、参加者も固定した環境での訓練が望ましいと考える。そのうえで、救護施設の強みは、個別対応や、特化した訓練時間の確保が難しい中、精神障害、知的障害、発達障害、身体障害や、障害手帳を所持していない参加者が混在した中での活動を展開できることである。

例えば、地域生活の経験がある身体障害の方が地域生活に不安のある精神障害者の方に対して生活の現状を伝える、または、お互いに得意なことや不得意なことを話し合い、打ち明けながら、話し合いや実践実習を進めていくことができる。さらに、居宅訓練事業の利用者や、通所事業の利用者にも、社会生活力プログラムに参加してもらっている。居宅生活や居宅訓練の悩みを、参加者とも共有し、時にはプログラムのテーマにも掲げる等、居宅生活や居宅訓練の利用をしている人への後方支援もしながら、実際に生活している人の話を聞いたり、ニーズにも対応できる力をつけたりする機会が提供できた。

今回取り組んだ「K I S S－18」の評価については、精神保健福祉士や社会福祉士の資格を持つ職員も携わったが、心理判定を行う上での方法や、その分析方法、フィードバックの在り方が、文献等で調べるといった手段でしか今回の研究ではできなかった。近年の救護施設の利用者の受け入れについても、精神障害や心理的な課題をもつ利用者が増えることが予測される。そのため、心理学や隣接科学における職員の配置も今後の救護施設には必要になってくるのではないかと感じた。しかし、心理尺度という評価を使用することで、利用者や職員が社会生活力の目標や課題を見つけるヒントとなった。今後取り組むべきこととして、様々な心理尺度を活用したり、継続して定期的に測定したりすることで、変化や成長が実感できるのではないかと考える。

社会生活を送る上で、100点満点の生活とはどのような生活だろうか。きっと自分だけの力で100点満点の生活を送っている人はいない。自分の足りない部分は、何らかの社会資源や、生計を共にする人（例えば家族等）で補っていると考えられる。ICF（生活機能・障害・健康の国際分類）の表をイメージして例えるなら、のぞみの家の中での社会生活力プログラムの内容としては、個人因子の助長に焦点が当たりやすい。今後は周りの環境因子の促進していく（活用

する) プログラムも積極的に取り入れる必要がある。今年度取り組んだ例としては、公共交通機関の利用や防災訓練学習である。公共交通機関を利用すれば、到底個人の力ではいけない場所にたどり着くことができる。防災の知識は、独学で学ぶより消防署の職員に協力を得ながら学んだ方が、より専門的に具体的に防災に関する習得が期待できるといった、周りの社会資源を自分の力(社会生活力)として活用する手段を参加者が体験できた。このような機会を今後も増やしていくことが必要である。

V 今後の救護施設の課題

のぞみの家では、地域生活への移行事業・活動として、社会生活力プログラムの他にも、居宅訓練事業や外部企業からの請負作業等の活動をおこなっている。冒頭でも述べたが、救護施設の「通過」「中間的」な役割における活動や事業は、広範囲にわたり、各々の救護施設においても取り組み方法は多様である。その活動に救護施設を送るうえで地域生活を目指す方が必ず参加している状況だろうか。

救護施設の役割は、社会生活力を見直す場であり、自身の社会の居場所を見つける場でもある。結果的に「通過」「中間的」な役割という抽象的な場となるのかもしれないが、施設で働く職員は抽象的な意識で支援を展開してはいけなし、救護施設が生活困窮者として社会生活が送れない方が留まる為だけの役割ではない。今回の研究を通じて、施設のおかれている環境、地域性様々あるが、社会生活力プログラムのような活動を救護施設で標準化したうえで、施設内の活動で終わらせず、例えば近隣の店舗で就労体験の機会をお願いしたり、地域の自治会の催しなどに参加したりするなど、市町村や医療機関、さらには地域を巻き込んだ包括的な支援の展開が実現できればと感じる。

VI 実践研究を終えて

今年度、社会生活力プログラムに参加した利用者の中で、2名の精神障害を持つ利用者が、社会生活へ移行することができた。Aさんは前年度から居宅訓練事業と社会生活力プログラムにも参加し居宅へ移行、Bさんは社会生活力プログラムにも参加しながら、家族宅への外泊訓練等も実施、自身のできることや、できないことの整理ができた結果、グループホームへ移行ができた。Aさんは、以前主婦をしていたこともあり、調理や掃除等の社会スキルは殆ど習得しており、他の参加者に教えることが多い方であった。Bさんについては、掃除も調理も最初は殆どできず、プログラムへの参加意欲も低い状況であった。当然、参加者からの評価もAさんとBさんでは違い、Bさんが地域生活を送ることは難しいという意見もあった。

施設で働く職員の視点として、のぞみの家では、寝たきりに近い全介助の利

用者も入所している。支援現場では大半の業務時間をその方たちへの介助に時間を割いているといっても過言ではない。職員は、ケアワークに追われる業務の中で、視点をソーシャルワーク＝社会生活に切り替えることは、専門職の資格をもった支援員でも見落とししてしまうこともあると感じる。

Bさんの生活スキルについては、社会生活を送るうえでは不十分と感じることが多かったが、施設生活を送る上で、施設で請け負っている内職作業にも参加し、工賃を受け取り、定期的に家族の家に外泊訓練（金銭管理や服薬管理）ができたことは、本人が持つ大きな社会生活力であったことに職員も気づくことができた。

今回の研究の目的に、社会生活で活用できるプログラムの実現と、本人や支援者にもわかりやすい社会生活に向けての評価・指標づくりを掲げた。社会生活力プログラムを通じて、利用者の福祉ニーズを汲み取り、明確化し、課題に対して実践することにより、次の目標を見つけていくということは概ね実現できたと考えるが、地域生活に向けてのわかりやすい評価・指標作りについては、心理測定という形でしか示すことができなかった。また、V章でも述べた、救護施設で社会生活力プログラムの標準化を目指すためには、現状の参加率が約2割程度でしかなく、参加者を増やしていくシステムづくりも必要と感じた。しかし、社会生活力プログラムに取り組むうえで私自身が実感したことは、地域生活に向けて100点満点の評価をとることではなく、自身のニーズを満たしながら、自らの人生を主体的に選択し、社会参加できる力＝「社会生活力」を身につける手段を理解し行動に移せること（目標管理能力）が大切であると感じたのである。

最後に、社会生活力プログラムを毎週実施できたのは、活動の裏では、必要なケアワークをしてくださる職員や、事務手続きや各関係機関との連絡調整（ソーシャルワーク）をしてくださる職員がいたからである。何より毎週プログラムを実施する中で、真剣に職員の話聞き、時には楽しく、時には試行錯誤しながらも社会生活力を向上したいという姿勢がある参加者に感謝し、この報告を終えたい。

※注1 KISS-18の心理測定結果は、全般的な社会的スキルを測定するために作成されている。「正常値」というものは、設定されていないが、さまざまな人たちを対象とした平均値が報告されている。菊池氏によると、社会的スキルとは対人関係を円滑にするスキルのことであるが、具体的に説明すると、他者から肯定的な反応をもらい、否定的な反応をもらわないように作用するスキルのことであると説明がある。

※注2 心理学者。ゴールドSTEIN氏らの資料を下に日本で作られたのが、KiSS-18である。

【参考文献】

『自立を支援する社会生活力マニュアル』～精神障害のある人の為に～
中央法規

『自立を支援する社会生活力マニュアル』～知的障害・発達障害・高次脳機能障害等がある人の為に～ 中央法規

『心理測定尺度集Ⅱ』～人間と社会のつながりをとらえる～ サイエンス社

『質問紙調査と心理判定尺度』～計画から実施・解析まで～ サイエンス社